

「百人隊長の信仰」

ルカの福音書 7:1~10

はじめに

神である主の権威、その命令は、いかなるものをも従わせる絶対的なものであることを前回、前々回に取り上げた箇所から解き明かしてきました。それに続く今日の箇所は、解き明かさずとも理解できるほどに神である主イエシュアの権威をうたった箇所であり、その御言葉の偉大さが隠されることなく前面に押し出され表されています。イエシュアの権威は、その命令、その御言葉には時間も空間も超越して事を成し遂げる力があることを今日の箇所から見るすることができます。そしてその成し遂げられる事実、神のご計画とは何であるかということが今日の出来事の中に「型」たえとして示されています。多くの場合、今日の箇所はイエシュアの権威と同時に、イエシュアを驚かせたという一人の百人隊長の信仰が賞賛され、私たちにも同様の信仰を持つようにという勧め、励ましのメッセージとして用いられます。そして私達は自分の願い求めのためにそれを叶えるような御言葉を熱心に求めます。ただ自分の願いを叶えるためだけの信仰、果たしてそれが信仰なのでしょう。そこに神のご計画は、「神の国」はあるのでしょうか。どうぞ今日もこれまでの理解や常識、偏見や先入観に捕らわれることなく、今日の箇所に記された御言葉、描かれた出来事に目をとめてくださいますように。シェーム・イエシュア！

1. カペナウム

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:1 イエスは、耳を傾けている人々にこれらのことばをすべて話し終えると、カペナウムに入られた。

カペナウム(קַפְּרַנְאִים)、この地名は旧約聖書には登場しませんがヘブル語で「贖う、覆う」という意味のカーファル(קָפַר)と「慰める」という意味のナーハム(נָחַם)が組み合わさった名と見ることができます。ではこの二つの言葉の本来の意味を示すそれぞれの最初の言及を見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

6:14 あなたは自分のために、ゴフェルの木で箱舟を造りなさい。箱舟に部屋を作り、内と外にタールを塗りなさい。

創世記【新改訳 2017】

5:29 彼はその子をノアと名づけて言った。「この子は、【主】がのろわれたこの地での、私たちの働きと手の労苦から、私たちに慰めてくれるだろう。」

これらの記述はどちらも大洪水による滅びを免れたノアについてのものですが、神が彼に命じて造らせた箱舟に「タールを塗り」という箇所に聖書で最初のカーファルが使われ、ノアという存在とその働きを指し示す「のろわれたこの地…労苦から…慰めてくれる」という表現の中にナーハムの本来の意味があることがわかります。これらの事実から、カペナウムという名に示された「贖う」、「慰める」とは、その罪を

覆われ、終わりの日にこの地に訪れる滅びから、かつてのノアのように守られること、救い出されることを意味する地名であるということです。そのような御業、神のご計画を成し遂げられる御方、それはまさに「救う」という意味の名を持つこのイエシュアである、ということがこの「イエスは、耳を傾けている人々にこれらのことばをすべて話し終えると、カペナウムに入られた」という御言葉に秘められた意味、神のご計画です。聖書の御言葉はどのような記述であろうとよく注意して「耳を傾けて」読まなければ、その多くの箇所が何の変哲もないただの状況説明となってしまいます。ただの状況説明であるならば神の御言葉である聖書に、わざわざ記す必要はありません。しかしこのように、カペナウムという地名に、そしてイエシュアがそこに行かれたという事実には、神のご計画を指し示す意味が秘められているのです。そしてここからその内容が「型」たとえとして秘められた形で記されていきます。

2. 百人隊長

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:2 時に、ある百人隊長に重んじられていた一人のしもべが、病気で死にかけていた。

7:3 百人隊長はイエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、自分のしもべを助けに来てくださいとお願いした。

7:4 イエスのもとに来たその人たちは、熱心をお願いして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。

7:5 私たちの国民を愛し、私たちのために自ら会堂を建ててくれました。」

7:6 そこで、イエスは彼らと一緒に行かれた。ところが、百人隊長の家からあまり遠くないところまで来たとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスにこう伝えた。「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありませんので。

7:7 ですから、私自身があなた様のもとに何うのも、ふさわしいとは思いませんでした。ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。

7:8 と申しますのは、私も権威の下に置かれている者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしる』と言えば、そのようにします。」

ここに記されている「ある百人隊長」、彼は自分についてこう紹介しています。「権威の下に置かれている者」であると。そして彼はイエシュアを自分の上に立つ権威者とし、言葉や口先だけではなくそのように行動をもって示したのです。つまりこの百人隊長は「神の国」におけるイエシュアを王とする御国の民の「型」です。上記の描写ではこの百人隊長はイエシュアに会っていない、みもとに行っていないように見えますが、イエシュアの権威を最大限に評価する形で二度にわたりそのみもとに行っています。その一度目は「ユダヤ人の長老たち」という形で、そして二度目は百人隊長の「友人たち」という形でイエシュアのみもとに行っています。なぜならこれらの人々はどちらも自発的に行ったのではなく、百人隊長によって、彼に遣わされて、彼自身の代理としてみもとに行っているからです。実際に並行箇所であるマタイの福音書 8:5 では彼自身が直接来たかのように要約して記されています。つまりこの「ユダヤ人の長老たち」と「友人たち」とはどちらも百人隊長に「型」として表された「神の国」の民を指し示す存在なのです。それはユダヤ人すなわちイスラエルの民であり、そしてその民とその家（神殿）を愛し、重んじ、祝

祝福する異邦人を指し示しているのです。アブラハムの子孫であるイスラエルの民を祝福することによって地上のすべての民族が祝福されるという、以下の御言葉の成就がここには示されているのです。

創世記【新改訳 2017】

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

「神の国」とは言い換えるならばこの御言葉の成就、実現する世界のことです。絶対的権威者である神、主がこれをこのように聖書に書き記させ、定めておられます。百人隊長のとった行為、行動にはこの事実がイエシュアによって、そのみもとにおいて行われ、成し遂げられることが示されていたのです。そしてその絶対的権威のもとにこれらすべての人が治められること、すべての者がイエシュアに聞き従うこと、すなわち「神の国」の統治形態、秩序がここには示されていたのです。これに目をとめられたイエシュアの御言葉が次の記述です。

3. イエシュアの驚き

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:9 イエスはこれを聞いて驚き、振り向いて、ついて来ていた群衆に言われた。「あなたがたに言いますが、わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません。」

ここでイエシュアは「これを聞いて驚き」とあります。このイエシュアの驚きを、私たちの感じるそれと同じにしないでください。ここでのイエシュアの驚きにもまた意味があるのです。ヘブル語でこれをターマハ(תמאח)と言います。その最初の言及は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

43:33 彼らはヨセフの前で、年長者は年長の席に、年下の者は年下の席に座らされたので、一同は互いに驚き合った。

これはイスラエル十二部族の長となったヤコブの息子たちについてのものですが、権力者であるヨセフの前に集められ、順序正しく並べられ、座らされたイスラエルの子たちに表された、秩序に対する「驚き」それが本来のターマハが指し示すものです。イエシュアは「ヨセフの子」と呼ばれていました(ルカ 3:23、ヨハネ 1:45)。その御前に、その権威のもとに集められるイスラエルの民、そのような事実が、神のご計画が、百人隊長のとった行動とそれを目にしたイエシュアの「驚き」という行為、記述には秘められているのです。

4. 救いの順序

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:10 使いに送られた人たちが家に戻ると、そのしもべは良くなっていた。

では、今日の箇所ではイエシュアがなされた御業、「しもべ」の癒しについて見てみましょう。彼の存在は一体何を表しているのでしょうか。これを理解するには神の御子イエシュアによる救いの順序を知る必要があります。今日の箇所から、神のご計画とは、救いとは、イスラエルとそれにつながる異邦人を「神の国」の民とすることすなわちイエシュアの「権威の下に置かれている者」とすることにあることが示されていました。その救いには秩序、順序があり、今日の箇所にはそれが「型」として表されているのです。では話を少し戻します。

この「救いの順序の型」として見るならば、カペナウムにいられたイエシュアのみもとに最初にやって来た「ユダヤ人の長老たち」とは、イエシュアが十字架にかかられた時に生き返った聖なる人々を表しています。

マタイの福音書【新改訳 2017】

27:50 しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。

27:51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、

27:52 墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる人々のからだが生き返った。

27:53 彼らはイエスの復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた。

この「眠りについていた多くの聖なる人々」が誰でどのような者たちであるかは聖書は詳しく記していませんが、これが幻でも詩的表現でもないことは十字架の事実と並記されていることから明らかであり、聖書が嘘偽りのない書である以上、これは事実です。この人々は復活の初穂（I コリント 15:20）と呼ばれるイエシュアのその「復活の後で、墓から出て来」たことが記されています。それまで彼らはシェオール、日本語では「よみ」と訳される場所にある「アブラハムの懐」と呼ばれる場所にいました。本来よみは火の苦しみを受ける場所のようですが、この場所だけは安全でした。このよみ、シェオールについてイエシュアご自身が説明しておられます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:22 しばらくして、この貧しい人は死に、御使いたちによってアブラハムの懐に連れて行かれた。金持ちもまた、死んで葬られた。

16:23 金持ちが、よみで苦しみながら目を上げると、遠くにアブラハムと、その懐にいるラザロが見えた。

これはたとえ話ではありません。ユダヤ人はたとえ話に「ラザロ」などと実名を用いないからです。このラザロをはじめ「多くの聖なる人々」は、よみにあるアブラハムの懐という場所にいたと考えられます。しかしイエシュアが十字架で死なれ、ここに下りて行かれ、彼らを解放したのです。実にイエシュアの死の目的はこの事にあつたのです。こうも預言されています。

エペソ人への手紙【新改訳 2017】

4:8 そのため、こう言われています。「彼はいと高き所に上ったとき、捕虜を連れて行き、人々に贈り物を与えられた。」

4:9 「上った」ということは、彼が低い所、つまり地上に降られたということではなくて何でしょうか。

そしてイエシュアは復活され、40 日の間弟子たちと過ごされた後、天に上られる際、同様に復活した彼らを引き連れて行かれました。

使徒の働き【新改訳 2017】

1:9 こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。

1:10 イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。すると見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らのそばに立っていた。

1:11 そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

イエシュアは「雲」に包まれ、これとともに天に上って行かれたとありますが、これは復活した「多くの聖なる人々」が御使いの軍勢のように輝いていたため、弟子たちの目にはそのように映ったのです。この「雲」という表現について以下のような記述も参考になります。

ヘブル人への手紙【新改訳 2017】

12:1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、一切の重荷とまわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。

このように、イエシュアが復活され、天に上られた時とともに引き上げられた、まさに携挙された人々があり、それが今日の箇所ではイエシュアのみもとに最初にやって来た、百人隊長に遣わされた「ユダヤ人の長老たち」の中に「型」として表されていたのです。

そして次にイエシュアのみもとに行った百人隊長の「友人たち」とはもちろん、私たち教会の「型」です。こう預言されているとおりです。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

このように、イエシュアによる救い、イエシュアによる携拳の御業は二度行われることが示されており、その一度目はすでに成就、実現しました。そして御使いが言ったように「同じ有様で、またおいでになります。」ですから二度目となるこの携拳もまた、イエシュアによって、その権威によって必ず成就します。

それではようやく本題の百人隊長の「しもべ」の癒しについてです。彼は百人隊長に最も重んじられる存在でありながら、死にかけるほどの重い病に苦しんでいました。この時のイエシュアの目的は初めから彼を癒すことにありました。百人隊長が「神の国」の民を表す「型」であるなら、この癒やされる「しもべ」とは、イスラエルの残りの者たちの「型」です。やがて獣と呼ばれる反キリストによってもたらされる世の終わりの大患難が、ユダヤ人とも呼ばれる彼らを襲います。その苦しみを受けるイスラエルこそがこの「しもべ」に表されているのです。しかしイエシュアが彼を癒したように、やがて地上に再臨されるイエシュアが、王の王、主の主としてのその絶対的、圧倒的権威によって獣を滅ぼし、イスラエルを救われるのです。そしてイスラエルとその家、国を建て直し、復興されるというご計画が、神のご計画の完成、完了であり、初めから定められた目的であることが今日のこの一連の出来事には表されているのです。

5. 適用

このような解釈を、多くの人は否定し、聖書と聖書を結びつけ、聖書を聖書で解き明かしているにもかかわらず、これを「こじつけ」と非難し、「聖書はもっと素直に、そのまま読めば良い」と言います。しかしそのような人も、「適用」と称して聖書を自分の身近な出来事や自分の生き方と結びつけて解釈しているではありませんか。そちらの方が、それこそが「こじつけ」ではないでしょうか。皆さんが聖書を自分と結びつけているのに、聖書と神を、聖書とそのご計画を結びつけて何が悪いのでしょうか、どこが間違っているのでしょうか。多くのクリスチャンが行っている安易な御言葉の自己中の「適用」と、永遠に続く「神の国」神のご計画の完成に目をとめさせ、これを求めさせる今日のような解釈と、一体どちらが重要か、言うまでもありません。真の御言葉の「適用」とは、自分の今の生活、人生と結びつけることではなく、神のご計画と結びつけることなのです。

この解釈、この信仰は今のイスラエルの民にはありません。ですからイエシュアは「イスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません」と言われたのです。この信仰は教会に与えられた奥義であり、これをイエシュアは賞賛されたのです。決して百人隊長という一人の人に対して言われたものではありません。百人隊長が持っていた信仰に対してイエシュアは賛辞を述べられたのです。その信仰は百人隊長が自らの力や努力で作りに出したものでしょうか。絶対にそんなことはありません。信仰は神からの賜物です。ですからほめたたえられるべきは常に神である主であり、信仰の創始者であり、完成者であられる主イエシュアただお一人です。

ヘブル人への手紙【新改訳 2017】

12:2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをもとせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。

神の御座の右から、信仰を完成させるためにやがて来られるイエシュアに、これからも目をとめ続けてまいりましょう。